

# 第16回ROBO-ONE in 富山

2009年9月26日～27日、富山市・富山産業展示館(テクノホール)にて開催された「ジャパンロボットフェスティバル2009 in 富山」内で、第16回となる二足歩行ロボット格闘競技大会「ROBO-ONE」が開催された。

おきみ  
梓 みきお

## 初の本大会・北陸開催

ROBO-ONE が初めて関東圏以外で開催されたのが、2005年9月の第8回(岐阜県・高山市)。その後第10回(山形県・長井市)、第12回(香川県・高松市)と続き、今回は富山県・富山市にて開催されることになった。2005年に当地で開催された「ジャパンロボットフェスティバル」内で「ROBO-ONE GP」が開催されていた縁もあったのかもしれない。

エントリー数は計63機と、第1回以来の少なさになった。これは9月26日に関東(千葉市)でROBO-ONE GP/ROBO-ONE GATEが開催され、出場選手が分散してしまった影響だろう。2大会ぶりに予選が復活した大会だったが、決勝トーナメントは従来と同じく32機が出場できた(第1回大会は16機によるトーナメントだった)ため、史上最も通過倍率が低い予選になった。とはいえ会場に集まった観客の数は普段とそれほど変わったようには思えず(写真1)、予選・決勝を通して観客は楽しんでいただけたようだ。

毎回ルールが少しずつ変わっていくROBO-ONEだが、今大会は比較的大きな変更があった。最大の違いは、体重30kgまでOKという大型・重量級の口



写真1 今大会使用のリング

ポットに対応してリングが広くなり、高さが低くなったことだ。まず広さだが、縦横が220cmの正八角形だったものが、縦横360cmの正方形の角から90cmのところまで角が落とされた、変形の八角形になった。高さは従来の半分の30cmとなり、大型のロボットを持ち上げる労力が少なくなった。同時にリングの耐荷重が静かに動くぶんには、成人男性が二人乗っても壊れないレベルにまで引き上げられた。

## 復活した予選

ROBO-ONEの予選につきものの規定演技は、「どんな道でも歩く」と「二足歩行ロボットがまだやったことがないこと」の2テーマ。「180度回転ジャンプ(第13回)」のように具体的な動きを指定していないため、参加者にとってはどんな動きで審査員に評価してもらうのかを企画する楽しみがあったようだ。また、観客にとっても出てくるロボットが金太郎アメ状態で同じような動きをする可能性が低い、楽しい予選になったのではないだろうか。

予選1位となり、今回から用意された賞金50万円を獲得したのは、「OmniZero.9(前田武志)」。前々回の優勝者であり、今回も優勝候補筆頭として注目されていた中で前田氏を作ってきたのは、なんと「乗れる二足歩行ロボット」だった(写真2)。

身長105cm、体重25kgというサイズなので中に入り込めるわけではなく、胴体上部にある空間にお尻を収めて乗っかる形である。なぜ「乗れる」ように作ったのかという問いに対して、前田氏の答えは「大型機じゃないとできないことは何か、と考えたんですよ」と、シンプルなもの。そのコメントのように、予選演技で前田氏をあっさりに乗せた「OmniZero.9」は、そ

のまま足踏み一旋回。会場はどよめきの後、大きな拍手に包まれた。

予選1位だった「OmniZero.9」は、文字通りケタ外れの能力を見せ、得点は400点満点中の355点。3位だった「ハンマーヘッド(大阪産業大学歩行ロボットプロジェクト)」が「弓で矢を射る」という「二足歩行ロボットがまだやったことがないこと」を含めたデモをノームスで終えたにもかかわらず250点だったのだから、その抜群の評価がわかるだろう。

「OmniZero.9」以外で唯一、300点台(321点)を獲得し、予選2位だったのが「Kinopy(小田利延)」だ(写真3)。もともと木琴を弾くデモを各所で披露していたが、今大会では「虫の声」を弾きながら歌い、喝采を浴びた。もちろん「どんな道でも歩く」も、ざっと敷いた人工芝マットの上を転ばずに歩いてしっかりとこなしたからこそその高評価だろう。



写真2 OmniZero.9に乗る前田武志氏